

第 22 回 富士山写真大賞

審査員 三宅 岳（写真家）

総評

2019 年、忽然と姿を現し世界を震撼させた新型コロナウイルス。その影響は未曾有で、今なお我々を根底から揺さぶり続ける。人の生命を直接に奪うという怖ろしさだけではなく、暮らし方のものを覆す前代未聞の事態が相次いだことは記すまでもなからう。

移動の自粛は全世界の人々に投げかけられた課題となった。富士山というこの国の代名詞のような山にあっても、多大な苦しみを背負うことにはかわりは無かった。2020 年は富士山の登山が禁止となった。開山祭も無く、山小屋は閉館という異様な事態であった。

すでに 20 余年の歴史を重ねて来た本コンテストにあっても、残念ながら当然にしてその大波から逃れるものではなく、2020 年度は開催延期を余儀なくされてしまった。

＊

＊

しかしながら富士山はやはり富士山である。ウイルスの思い（有るか無いか知るよしもないが）など全く関係なく、泰然自若のその姿は、何ら変わることも無く悠然と立ち現れるそのままである。そして、2021 年度、様々な制約を設けながらも富士登山は再開。本コンテストにあっても一年の空白期間を経て、ようやく再開となった。本写真展での上位入賞を目指して日々研鑽してきた多くの参加者にあっても、そして、主催者、共催者、さらには多くの関係者一同がホッと胸なで下ろす再開である。とはいえ、コロナの影響が色濃く浮かんでいる。その影響を少しだけ要約してから、富士山写真大賞の評に移りたい。

まず、参加者である。応募点数 1160 点、応募人数 342 人 は、いずれも前回である 2019 年度の第 21 回の 8 割を割った。募集期間が二年分あったにもかかわらず、この数字というのは、やはり多くの方が自粛生活を余儀なくされた反映。また、富士山を抱える山梨県・静岡県に加え、その近郊である神奈川県・東京都・千葉県・埼玉県からの応募が 7 割以上。遠方からはるばる富士山を狙って、という撮影行が行えなかった実状がよくわかる。

そういった厳しい時代・環境にあっても、なお富士山と対峙し切磋琢磨した結晶が集結したコンテストが、今回の、「第 22 回 富士山写真大賞」である。

＊

＊

さて、前置きが長くなった。いよいよ評である。

金賞「夕照の波飛沫」岡久敏明さん撮影

葛飾北斎の代表作の一つ『神奈川沖浪裏』をあげるまでもなく、富士の高嶺は海と組み合わせられての作品になることがとても多い山である。多くの国内 3 千メートル峰が、巨大な山脈内の一座として、時には山々に埋もれてしまう存在であるのに対し、この富士山は、ただ一人孤高を惜しまぬ独立した火山峰である。しかるに、周囲に惑わされることなくすくっと立ち上がる丹精にして優美な姿は、山々から眺める姿ばかりでは無く、海拔 0 メートルという海の際から遠く望んでも、その品位を一切崩すことなく、いやいや、海際だからこそ均整のとれた美しさを立ち上げている。他の高峰がいかにかがこうとも及びもつかぬ、端麗にして秀麗なる姿である。

さて、写真という表現にあっても、富士山と海という組み合わせは、古典的といっても良いほどに好相性をみせる。本作品の作者も、この古典的な命題に挑み、見事にその表現を昇華させている。

打ち砕け跳ね上がる波にキラリと刺さるように喰い込む日射。手前に配置された濡れた岩の黒さも、また一層に波を輝かせる。そしてその波の動きを、瞬間に止めるでも無く、かといって流しっぱなしにするのでも無く、微妙なシャッタースピードで撮影することで、絵画表現とはひと味ふた味違う、写真ならではの動感を持たせたのは、撮影者の卓越した技量と見る。そして、写真を完成に導くのが、背後に静かに控え、しかし無限の偉容を誇ってそびえる富士の山。

今回のコンテストにあっても富士と海を組み合わせた写真は少なくなかったが、この見事な瞬間を捉える技に、古典の組み合わせでありながらも突き抜けた新鮮なものものが漲っている。また、結果的に夜の作品が秀でたコンテストであったが、日中の明るい富士という点でも、ひとときの輝きを見せている。

銀賞「銀河へ」勝亦裕さん撮影

夜は純粋である。雑念は一蹴され、混ざりものは一切の気配を消す。撮影者の前には少し扁平になった雪の富士山があり、その向こう側一面に広がるのは銀河である。底の見えない底冷えが画面を引きしめ、黒に黒を重ねた漆黒に、大小無数の星と天の川が明滅する。

かつて、というよりほんの一昔以前までは、夜の帳が落ちてからの撮影には、かなり制限があった。いうまでも無く、フィルム時代の感度は低かったのである。ところがデジタルカメラの進歩と普及により、夜の写真も身近なものに移行した。本作品のように、煌めく星々と山を組み合わせた写真が作品にまで昇華するのも、デジタルのおかげである。

というのは、あくまでこの作品を技術の面から語るだけに過ぎない。それだけでは作品など誕生しないはずだ。この凍てつく季節に富士山に赴き、天の川と富士山の織りなす微妙な構図のタイミングを見据えて、いよいよシャッターを切る。そこには並々ならぬ富士への熱情があるはずではないか。もう少し手前を切って空を大きく入れても良いのではないか、とわずかに思うものの、この何処までも透徹した世界を写し止めた作者の意図は見事である。

銅賞「弘遠」渡辺守さん撮影

富士は霊峰にして信仰の山である。各地に見られる浅間神社をはじめ、村山修験や富士講など、富士山は信仰対象であり登拝の山という歴史を刻んできたのである。そして信仰の歴史は過去のものでは無く、今もなお連綿と続く進行形なのである。

さて、北極星を軸とした天空宇宙の星の同心円状の流れを収める写真は、フィルム時代より山の夜を表現するのに多用された長時間露光の表現である。デジタルになった当初は、長時間での露光はノイズも多くなり苦手な分野であったが、比較明合成がポピュラーな技法となり、再び夜空の表現として多用される傾向になってきた。カメラによっては、星の軌跡をきちんと再現できるモードさえ搭載されているのである。

本作品では、山頂の鳥居を前面左部に主題として据えた潔さが目をひいた。信仰の山であることをぐいぐいと前面に押し出し、星の刻んだ同心円を右後方にずらすことで、画面のバランスもとれている。右下方彼方の街明かりも、この山のスケールを感じさせる心憎い演出となっている。銀賞とは紙一重の差であったが、それは同心円での星々の表現が、どこかで見たような記憶に重なった弱さ故であり、夜の富士を舞台にした作品としては、ほぼ互角の鏝迫り合いであった。

あとは一気に6点の優秀賞にふれておきたい。

優秀賞「希望の環」飯田龍治さん撮影

見事な気象現象を、的確に捉えた作品である。流れ湧きあがるのは霞か雲か。おそらくは満月であろう光の球が見事七色に滲んだ様を、適切な露光で活写している。こういった時の気象変化は驚くほどめまぐるしいはずで、その条件下でしっかりと画面を作っている。惜しむらくは、手前の枯れ野の面積が少し多いことで、さらに空を多くするか、あるいは画角を狭めた方が、より一層の迫力を増したものと考えられる。

優秀賞「一瞬のかげり」上野祐司さん撮影

正面から堂々としたフレーミングが好ましい。諸雑を排した、シンプルで思い切りの良い構図である。地平線ギリギリの光線にあぶられ赤く赤く焼けた富士の山。その山頂に暗い影が走ったのを見逃さなかったのは、見事だ。頂とは明るいばかりではなく、このように重々しく沈み込むこともある。その光の妙が産み出した重さこそが、本作品の要になっている。

優秀賞「月光」加藤昇さん撮影

感材がデジタルに移行して、夜の写真が圧倒的に増えている。本コンテストでも、星や月と富士山の組み合わせが数多く入選している。それも時代の流れとして、ヨシとしたい。さて、本作品もそういった一点。富士山を左下に配して冷光放つ満月を右肩上に置く。なんとも決まった揺るぎの無い構図である。その動かざる景に雪煙が応える。その動きがあってこそその入選。静の中に透き通るかのような動を垣間見る作品だ。

優秀賞「富士も翼を広げた日」波木井芳雄さん撮影

すばらしいタイミングを捉えている。富士山は様々なモノと組み合わせられて撮影されることが多い。動物との組み合わせとして、鳥と富士山という組み合わせもいわば伝統的なセットなのである。とはいえ、これだけ良いタイミングで、しかも二羽。そして富士にかかる雲。富士にも翼、とタイトルがつい走ってしまうのも無理からぬところか。画面右側の空間を大きくとりすぎていることがやや惜しまれる。

優秀賞「日本の心」松本直己さん撮影

富士山と雲の組み合わせも、実に定番である。すでに 20 回以上となる本コンテストにあっても、見応えある作品が数多く入選している。それだけに、雲と富士山に対しては、少しばかり審査の目が厳しくなってしまう。そのなかでも、このシンプルな構成は秀逸である。側面からの光もヴェールのような雲もひとときの繊細さを放っている。

優秀賞「レトロな栈橋と夕焼け」峰岸昭子さん撮影

暮れ時。静謐にして心揺さぶられる時間帯。紅に焼けた雲。その紅をたおやかに写す海面。灯火と栈橋。少年であろうか、行くか帰るのかさえおぼつかぬ二人。時間と景色があやとなり交錯する。紡がれるのはどこか不可思議な物語だ。そして、彼方に控える富士。すべてを見通すかのようなシルエットがあって、富士山の写真作品としてむくりとその姿が現れている。

以上が優秀賞までの評である。これに続く入選作 41 点は、いずれもが、あと一步で優秀賞に手が届く作品ばかりであった。惜しい、残念と思う作品ばかりであった。残念といえば、今回は地方

の「おらが富士」での傑作が少なかった。

油断はならぬが、少しずつ以前の暮らしを取り戻しつつある現在、是非是非、さらなる上を目指して、富士山と対峙し、心を込めてシャッターを切っていただきたい。選者の一途に願うところである。